

保育者になるための読書案内

これから社会に出て、仕事に就く人のために

2020



横浜女子短期大学図書館

まえがき

これから保育者になったり、社会に出て行くみなさんにとって、大切なことは、自ら考え、行動する力を養うことではないでしょうか。こうしたことは、案外見落とされがちです。それは、当たり前だと思われるからです。

しかし、少しでも時間があったら、本当に当たり前のことなのかを考えてみるとよいのではないのでしょうか。ついでに、そんなことをどこかで習ったことがあるかどうかについても。

もし、そうした経験がなかったとしたら、自ら考え、行動する力というスキルは、自分で切り開いていかなければなりません。そのときに、どうしたらよいでしょうか？

読書だけがその役に立つ、などとは言いません。でも、これから先、社会人となり、自分で何かをしなければならなくなったとき、相談相手になってくれるのではないのでしょうか。だって、本は、あなたがたの先達によって書かれたものですから。次のような構成を考えてみました。

第1部 保育者になるための読書案内

ここには、先生方からのメッセージが収められています。みなさんが、これから保育者になったり、社会人になるときの参考になるような本が紹介されています。いつでもいいです。ぜひ、手にとって、目をとおしておいてみてください。

第2部 いつでも、どこでも、どんなときでも、あなたのそばに、本を

ここで紹介する本は、教科書のようなものでも、また、娯楽のための本といったものでもない、中間的なものです。これらを読むことによって、人間形成の基礎をつくることになるのではないかと、人とかかわる仕事に就くための一助となるのではないかと考え、2019年度に館員が図書館報で紹介した本から選びました。

第1部 保育者になるための読書案内

倉橋惣三『小さな太陽』(フレーベル館 2011)ほか

亀谷美代子

倉橋惣三・ことば 大豆生田啓友・撰／小西貴士・写真『小さな太陽』(フレーベル館 2011)

この本は、ポストカードブックです。16枚の子どもの写真に倉橋惣三が著した「育ての心」の詩的な言葉が添えられています。「小さな太陽」というタイトルは、「天の太陽は雲につつまれる日があっても、この小さな太陽たちは、いつだって好天気だ」という文章からとられています。あなたも、保育する中で、たくさんの子どもの表情、仕草、心に出会うことでしょう。そして、『育ての心』も読んでください。

繁多進『愛着の発達』(大日本図書 1987)

著者の繁多先生は横浜女子短期大学の保育センターの研修を長年担当してくださり、多くの保育者に「愛着関係」の大切さを具体的にそして科学的に講義していただきました。

保育がうまくいけなくなったり、理解しにくい子どもに出会ったり、子どもの素敵な可能性に接した時……読んでください。親と子ども、子どもと保育者、人との関係の原点が示されると思います。

時実利彦『人間であること』(岩波新書 1973)

保育している中で、「子どもはどうして…?」「親子って何?」「家族って何?」……と、そして、あなたも含め「人間って何?」と思ったら、読んでください。20億年前ごろから、この地球上に生命が誕生し、その生命の一つとして、人間は他の動物が発生したり、絶滅したりする中、今も歴史を繋げ、文化を生み出し生活しています。いいかえれば「保育」はその一端を担っています。「人間」を知り、「保育」の意味を探る一つの手立てになると思います。

以上は保育の近・現代における保育・幼児教育思想、心理的、生理学的解明から人間の発達の原理と子育てにおける意義を説いています。それに加え松田道雄『定本育児の百科』(岩波文庫 2008)は、昭和 40 年代、当代表的な各家庭が備えた「育児書」です。保育所、幼稚園での保育の参考書の源になっていた本書が 2007 年にリニューアルされて、文庫本 3 巻として出版され、読まれ続け 2013 年現在第 9 刷となりました。

そして、育児が社会化された現代、2016 年に秋田喜代美監修『あらゆる学問は保育につながる』(東京大学出版会)が出版され、東京大学に「東京大学大学院教育学研究科附属発達保育実践政策学センター」が誕生しました。本書は前保育学会長の秋田喜代美氏が中心に 10 名の研究者が第 1 部「社会と保育」、第 2 部「発

達と保育」、第 3 部「保育と学問」に著しています。彼等は「子育ては、学問にとって最高難度の研究テーマ、あらゆる学問領域の専門家が結集し、新しい知の地平を切り拓く」とし、「保育」の奥深さを現わしています。

柴田悠『子育て支援が日本を救う』(勁草書房 2016)は、京都大学人間・環境学研究科の准教授が「経済成長率」「労働生産性」「出生率」「子どもの貧困率」「自殺率」などの重要な社会指標に対し、子育て支援など社会保障政策がどのように影響するか統計的に分析し、「子育て支援が日本を救う」という結論を導いています。



白石正久『発達の扉 子どもの発達の道すじ 上』(かもがわ出版 1994)

佐野 眞弓

この本は、私が保育者だった時そして今でも、とても大事にしている一冊です。再就職してお世話になった園長先生が、「自分の保育に悩んだり躓いたりした時は、子どものことを考えることから道は開けます」と教えてくださいました。そんな時出会ったのがこの本です。子どもの発達を、できたできないでは無く、子ども自らが乗り越えていく一歩前をいく活動と捉え、乗り越えていく葛藤を支え励ます大人のあり様とありのままの子ども姿を通し書かれています。落ち込んだ時はこの本を読んで、「そうだ目の前の子ども一人ひとりを大切にしていくことが私の仕事」と思ってきました。皆さんも、

自分の保育に悩んだり落ち込んだりしたら、ぜひ読んでみてください。著者自らが撮影した子どもたちの生き生きとした目とかわいい表情の写真と、まるで講演でも聞いているような優しく語りかけるような文章は、前頭葉に染入る様な心地よさが感じられます。



津守真『保育者の地平－私的体験から普遍に向けて－』

(ミネルヴァ書房 1997)ほか

本田 幸

津守真『保育者の地平－私的体験から普遍に向けて－』(ミネルヴァ書房 1997)

著者の津守真先生は発達心理学の研究者として、長年にわたり子どもの研究をされてきた方です。『保育者の地平』には、著者が12年間、愛育養護学校の校長として子どもと関わり、保育実践を行った体験がまとめられています。ご自身の保育者第1日目から、12年間の保育者としての実践と省察が書かれています。5年目からは、担任も経験されています。この本を通して、保育者にとって大切なのは子どもと過ごす「いま」であるということ強く教えられます。さらに、保育を実践する上で、子どもを理解することの難しさや担任としての悩みなどにも触れられています。そのような意味でこの本は保育論であり、保育者論でもあります。保育の仕事は、楽しさや喜びが沢山あります。けれども、私は、保育は言葉や理論で表現されるほどに簡単ではなく、実践することは本当に難しいと常々思っています。難しいからこそ、やりがいがあるのかもしれません。



吉村真理子著・森上史朗 [ほか] 編『保育実践の創造－保育とはあなたがつくるもの－』(ミネルヴァ書房 2014)

本書は、著者吉村真理子さんの35年にわたる保育の実践記録を、改めて復刊したものです。30年以上前の記録にもかかわらず、そこから学ぶことはたくさんあります。吉村氏は「保育をするよろこび」からの出発が大切であると述べています。この本には、著者が保育の中で困難な場面に遭遇した時、それを知恵と工夫と仲間同士の協力(協働)で乗り越えてしまう事例が書かれています。例えば、こんな事例です。ある6月の暑い日に、子どもたちをなんとかさっぱりさせてあげたい。そこで、保育



園の2階の乳児室からホースをひっぱり、園庭にいる子どもたちに向けてお湯のシャワーをつくってあげました。子どもたちは大喜びです。吉村氏は、前向きに、真摯に、時にユーモアも忘れずに保育に取り組んできた方です。この本の、「－保育とはあなたがつくるもの－」という著者からのメッセージは、いつまでも私に残るものとなりました。

ヨシタケシンスケ『もうぬげない』(ブロンズ新社 2015)

「ぼくのおふくが ひっかかって ぬげなくなって、もうどのくらいたったのかしら」「おかあさんが「おふろに はいろう」なんていうから いけないんだ」

お風呂に入るために、男の子は洋服を脱ごうとします。「ひとりでぬぐから だいじょうぶ！」とがんばりますが、服が頭にひっかかって脱げません。お腹とおへそが丸出しで、顔は服で隠れてしまっています。何しろ手が動かさ

ません。「このまま ずっと ぬげなかったらどうしよう。ぼくは このまま おとなになるのかな。」男の子は、服がひっかかったまゝいろいろな想像をめぐらせます。でも、決してすぐにはめげません。ちょっとシュールで、ユーモラスな絵本です。

私がこの絵本に惹かれたのは、お話しの面白さ、絵の魅力と合わせて、作品の中に日々の生活を一生懸命に生きている子どもの姿を感じたからです。「ひとりで やりたい！」という子どもの思い。脱げなくなっても何とかなるさ！という逞しい気持ち。「ぼくだって そのきになれば じぶんのことぐらい じぶんで じぶんで…」男の子の思いが、絵本の中から伝わってきます。子どもには、生きていこうとする力、成長しようとする力がちゃんと備わっているのですね。



亀谷美代子『平野恒』「シリーズ福祉に生きる68」(大空社 2015)

元本学教授 兼子 盾夫

「おさなごにまなぶ」を生涯、実践した「平野恒」
児童福祉に生きる恒の姿—『記念樹』の園長の
モデル

児童福祉に生きる平野恒の姿は、昭和 40 年
から翌年にかけて日本中に感動を与えた、TBS
の TV ドラマ『記念樹』に描かれた、厳しくし
かも優しい園長の姿そのままである。

恒から聞く実話を元に木下恵介監督が養護施
設の若い保母と子ども達の心の交流を一話完結
で描き、結婚を機に園を去る保母の家に子ども
達が記念の樹を植える、このドラマはその年の
「児童文化賞」を受賞した。

平野家の「キリスト教的愛」と「家庭環境」
—恒の生涯を貫く原動力

恒の教えを直接受けた著者は児童福祉とその
前提となる保育者教育に捧げた師の 98 年の歩
みを読みやすい筆致で「福祉シリーズの一冊」
に切り取って見せる。

医師で国会議員の父友輔と日本の最も早い時
期の看護師である母藤の第二子として明治に生
を受け平成に没した恒の生涯。理想的な家庭環
境に恵まれただけ、それは亦「天職」に伴うい
くたの試練との闘いの連続でもあった。

恒はクリスチャンで自由民権家の父からキリ
スト教の根底にある人間の尊厳と隣人愛を、母
からは衛生的な家庭環境と保育に必須の小児栄
養の知識を実践的に与えられた。これらはそれ
に欠ける子ども達を前にしたとき、大人の義務
・子供の権利として、終生、恒を前進させ、問
い続けさせた保育の「原動力」である。

「無鉄砲」の実践としての転機—神への「完
全なる委託」

著者は手際よく恒の生涯を何本かの柱をた
て、即ち生い立ち、矢嶋楯子・二宮ワカとの交
流、信仰のネットワーク、人生の転機と社会事
業・児童福祉、そして保育・幼児教育のステー
ジへと纏め上げる。恒の生涯の転機は二度ある。
一度目は二宮ワカの推薦で矯風会横浜母子寮の
寮長を引き受けたとき。しかしこれは二年を待
たず恒を青山学院神学部へと進ませる。それは
婦人の更生に根本的な矛盾を感じた故で、負の

循環を断ち切るには大人になってからでは遅
い、「幼児期の保育こそ人間生涯の人格形成に
一番大事だ」との信念に基づく。そして二度目
は敗戦直後、戦災で恒の福祉事業がすべて灰燼
に帰したときだ。

思えば恒の人生は大正 12 年の大震災と昭和
の太平洋戦争という日本の二度の激動期を生き
抜いた波乱の人生である。大震災における平野
家の全壊や翌年の父友輔の突然の病臥は恒個人
にとって計り知れない不安、苦痛、困難の因と
なったであろう。しかし天の父しか畏れる者
を持たない気丈な恒をも絶望のどん底に陥れたも
のは終戦直後に直面した人間の忘恩、無情さと
社会に充満する利己主義で、どんな愛を与えて
も裏切りで報いる心無い大人の対応であった。

がしかしこの時は皇后様や秩父宮妃殿下とい
う皇室からの励ましが明治人恒を立ち上がらせ
た。恵まれぬ母子の福祉、子供の権利のため
自分がやってきた仕事を評価して下さる方々が
存在する。子供たちのためにもう一度、立ち上
がるのだ。そう思うと恒の行動は素早い。戦後
の復興期に大活躍し海外視察、ホワイトハウスの
会議にも呼ばれる。その成果を還元し各地で
講演する。各種の委員会に委員として加わる。
昭和 15 年に創った保母学院を再建し、中村に
再建された保母学院は、最終的に学校法人格を
得て昭和 41 年横浜女子短期大学(保育科)とな
った。

「おさなごにまなぶ」を生涯、貫き通した平
野恒の生き方を伝えるこの魅力に満ちた伝記に
は冒頭の平野建次学長の「『おさなごにまなぶ』
の思い出」から巻末の「年譜」他に至る迄、恒
の血を引く者、教えを直接受けた者、恒を尊敬
する者という恒の周囲のすべての人の協力が伺
える。著者は「おわりに」
ある如く直接、恒の教えを
受けた者だが、その後地方
行政にも携わりつねに児童
福祉、保育の最前線を歩み、
かつて恒の創立した短大で
教鞭をとり、今また白峰保
育園の園長を勤める保育者
である。



第2部 いつでも、どこでも、どんなときでも、あなたのそばに、本を(図書館から)

大久保美玲

古宮昇『傾聴術』(誠信書房 2008)

「話し上手は聞き上手」とよくいいますが、人の話を上手に聞くのは意外と難しいものです。だからこそ、聞き上手の人が身の回りにいると心強いもの。もし、周りにそんな人がいなかったら、あなた自身が聞き上手になってみませんか？ 本書では「傾聴術」(人の話を聞く技術)について分かりやすく解説されています。例えば、傾聴で一番大切な姿勢のひとつは「話し手をそのまま尊重し受け入れること」。つつい正反対のことをしてしまっている自分に反省。傾聴術は、普段の人間関係ではもちろんのこと、保育者を目指す皆さんにきっと役立つはずです。



大切にする自己表現」のこと。相手の立場を考えつつ、自分の言いたいこともしっかり伝える技術です。本書はアサーションについて分かりやすく解説しています。日常に是非アサーションを取り入れ、少しでもストレスない生活を送りましょう。



今村夏子『星の子』(朝日新聞出版 2017)

ちーちゃんは、素直で食いしん坊でめんくいなとてもよい子。両親は、ちーちゃんが小さい頃病弱だったために、新興宗教の信者となりちーちゃんを救います。成長して周りの環境がどんどん変わっていく中でも、ちーちゃんは変わらず両親や信者の仲間達が好き。それが不思議な感覚になって読者にじわじわとせまります。作家の小川洋子さんは今村夏子のことを「狂気を突き抜けた先にある哀れさのようなものを描ける人」と賞しています(神奈川新聞 2019年8月1日朝刊)。『星の子』もまさに、狂気の先にある幸せ、そこから醸し出されるそこはかない哀れさが溢れています。今村夏子作品の入門書としておすすめです。

平木典子『マンガでやさしくわかるアサーション』(日本能率協会マネジメントセンター 2015)

新しい環境に身を置いたとき、いちから人間関係を作ることは大変ですよ。言いたいことがあっても最初だから我慢しようと考え、徐々にストレスが溜まってしまうようなこともあると思います。そんな時に役立つのが「アサーション」です。アサーションとは「自分も相手も

高橋 和子

森健『「つなみ」の子どもたち 作文に書かれなかった物語』(文春文庫 2019)

2011年3月11日午後2時46分、みなさんは何をしていましたか？ この本は、被災して、津波に追われながら逃げた子どもたちの震災直後の作文と、その後の取材で知り得た家族との関係や地域愛、子どもたちの精神的成長などが書かれています。当時一瞬にして何もかもなくし、みんなが途方に暮れていた時、子どもたちがどう受け止めていたのかがわかる7人の作文です。昭和8年の大津波の時を書いた人は89歳で、今回の津波に遭われたのですが、小学校からの仲良しの友達が3人、今回の津波も生き

延びたそうです。“天災は忘れた頃にやってくる”と言われる。時間とともに忘れてしまわないように心にとめておくことが大切だと思える1冊です。



P-kies 編『ポンキッキーズの101 メッセージ
一分間パパ・ママ学』(文藝春秋 1998)

みなさんおなじみのポンキッキから生まれた育児書です。平成9年当時、毎日番組の最後に一分間放送されたメッセージを、本にまとめたものです。掲載されている言葉は、なるほどと思うようなことや、結構当たり前だなと思うことがいわれているのですが、はっと気付かされ、すんなりと心に入ってくるから不思議です。メッセージを寄せている人たちの職業は、大学教授や登山家、絵本作家など多岐にわたっています。

福岡伸一『福岡ハカセの本棚』(メディアファクトリー新書 2012)

生物学者である青山学院大学の福岡伸一が選りすぐりの本を100冊薦めています。本書は、

2011年から12年にかけてジュンク堂書店池袋店で「動的書房」として紹介された400冊から絞り込んだものです。自身が今までに読んで感動し、大人になっても忘れられない本を、生物学はもちろんのこと、絵本、児童書、絵画、民俗学など幅広いジャンルから取り上げています。紹介文には、実際に現地に行った経験談、作家や記者との対談エピソードなども含まれていて楽しく読めます。巻末には400冊のリストもあります。



原 真由美

香山リカ『大丈夫。人間だからいろいろあって』(新日本出版社 2018)

著者は精神科医として30年以上患者さんの心に向き合い、また大学の教員として学生とも関わりを持っています。最近、周囲にあわせて自分の個性を抑えている学生を見かけることが多く、自分らしさが発揮されていないと言います。どんな人にも底力が備わっているから、今は落込んで弱音を吐いてもいいんだよと無理強いしない文章に肩の荷がおりて楽になります。少し疲れた、心が晴れないという時にぴったりの一冊です。



辰巳芳子『食の位置づけ』(東京書籍 2008)

みなさんは、自分の食べたもので身体が作られていると考えたことはありますか？ お腹がいっぱいになれば何でもいいというのは危険です。手をかけた食で生命を守ることを訴え続けている95歳の辰巳芳子(料理家)は、食は「人間の知性、感性をも左右」する重要なもののだと言います。出汁をとったお味噌汁や、今の季節

なら新鮮な旬の野菜を取り入れるなど、少し気をつけるだけでも違います。食は生命を維持する基本、よりよく食べることは自立心や健康な心身を育みます。生涯つきあう大切な身体です。女性のみなさんに知ってほしい本です。

今関信子『大久野島からのバトン』(新日本出版社 2016)

瀬戸内海に浮かぶ大久野島は、今から70年前、地図から消されたことがありました。戦争のために毒ガス兵器を製造していたからです。終戦を迎えると証拠隠滅のため、施設は解体され、作業をさせられ、後に後遺症に苦しむ多くの人だけが残されました。高校一年生の香織は課外授業で大久野島を訪れ、少年の頃に島で働いていたという資料館の館長と出会い、埋もれた歴史と向き合い引き継ぐことを学びます。

「戦争は一気に始まらない。少しずつ近づいてくる」という言葉はとても大切です。





あらためて考えよう 昔ばなしのすばらしさ
おすすめの昔ばなし絵本5選



昔ばなしには、何百年も前から語り継がれ、時代にもまれながら生き残ってきた、おもしろいエッセンス満載のおはなしが沢山あります。

実習で読み聞かせの絵本に迷ったら、昔ばなしを取り上げてみてはいかがでしょうか？ 必ず子ども達の心を惹き付けることができるはずです。

ここではオススメの日本の昔ばなし絵本5冊を紹介したいと思います。

(大久保)

【笑える話】

長谷川摂子文 荒井良二絵『へっこきあねさ』岩波書店 2012

おならが豪快すぎるお嫁さんの昔ばなしは何パターンも存在しますが、ここでは荒井良二さんが絵を手がけたものをご紹介します。荒井良二さんのかわいらしい絵とおかしなお嫁さんのお話がマッチして子ども達もくぎづけになることでしょう。



【こわい話】

水沢謙一再話 梶山俊夫画『さんまいのおふだ』福音館書店 1990

やまんばが小僧さんをとことんまで追いかけるとも迫力のあるお話。緊迫感が子どもを惹き付けます。最後の和尚さんとやまんばのトンチ合戦もみどころ。

【泣ける話】

瀬戸内寂聴文 岡村好文絵『月のうさぎ』講談社 2008

自分の身を犠牲にして大切な人を助けるお話。この仏教における菩薩行という考えは宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』のカムパネルラに通じています。



【恋する話】

矢川澄子再話 赤羽末吉画『つるにようぼう』福音館書店 1989

動物が恩返しをするお話は、昔ばなしから現代小説まで綿々と受け継がれてきた題材です。最近では映画にもなった『陽だまりの彼女』がそうですね。昔ばなしを知っていると、現代の小説などをより深く楽しむことができます。



【すっきりする話】

木下順二 著 清水崑絵『かにむかし』岩波書店 1976

だれもが知っている「さるかに合戦」。本書は読み聞かせしやすいよう、擬音を豊富に使うなどの工夫がされています。さる退治の場面も、残酷さはなく、子どもが無邪気に楽しめるようにさらっとしています。カッパのイラストでおなじみの清水崑さんの絵が愛らしいです。

保育者になるための読書案内

これから社会に出て、仕事に就く人のために 2020

横浜女子短期大学図書館 2020.03.13.